

# 漱石文庫所蔵「自筆イギリス地図」について

曾根原 理

## はじめに

東北大学附属図書館が所蔵する漱石文庫の中に、「自筆イギリス地図」2点(請求記号:自筆資料等 6-7,以下「本資料」と記す)が存在する。筆者は以前、機会を得て次のような解説を記したことがある。

鉛筆書きで、大ブリテン島全体図と、スコットランド地方の拡大図の2点が残されている。前者には黒系、後者には赤系のインクで、地名等の書き入れがある。漱石は明治35年(1902)10月、親日家の貿易商ディクスン氏に招かれスコットランドのピットロホリー Pitlochry を訪ねた。後日その体

験を「昔」という短編(『永日小品』所収)に描いている<sup>1</sup>。

本資料の存在は、2003年10月31日～12月21日に仙台市博物館において開催された企画展に出品され、同時期に漱石文庫の画像データベースがインターネット公開されたこともあり<sup>2</sup>、すでに少なくない人々に知られている。しかし、漱石が地図を記した意味については、管見の限り明確に論じたものを知らない。漱石は、どのような活動を通じて、本資料を作成したのだろうか。本稿はその点に関する考察の試みである。

## 1. 漱石とスコットランド

二枚の地図のうち一枚は、大ブリテン島の全体を範囲とする(以下「全体図」と記す)。しかし後述するように、そこにペンで書き入れられた三カ所の地名は、いずれも北部に集中している。さらに他の一枚は、スコットランド地域の拡大図である(以下「地域図」と記す)。そこから「全体図」と「地域図」、二枚の地図を記した際の漱石の関心は、スコットランドに向けられていたと言っていだろうか。では漱石は、スコットランドにどのような関心を持っていたのだろうか。

明治33年(1900)の秋にロンドンに着いた漱石は、2年間の留学期間中ほとんどロンドンを離れなかったが、唯一に近い例外として<sup>3</sup>、明治35年(1902)10月頃にスコットランドに旅行した。漱石が後日、その時の体験を『永日小品』の中の「昔」という短編に記したことは、前掲解説の通りである。「昔」の冒頭は、次のように書き始められている<sup>4</sup>。

ピトロクリの谷は秋の真下にある。十月の日が、眼に入る野と林を暖かい色に染めた中に、人は寝た

り起きたりしてゐる。十月の日は静かな谷の空気を空の半途で包んで、ぢかには地にも落ちて来ぬ。と云って、山向へ逃げても行かぬ。風のない村の上に、いつでも落附いて、凝と動かずに震んでいる。其の間に野と林の色が次第に変わって来る。酸いものがいつの間にか甘くなる様に、谷全体に時代が附く。ピトロクリの谷は、此の時百年の昔し、二百年の昔にかへって、安々と寂びて仕舞ふ。

スコットランドの自然や風景の記述に続き、漱石は、滞在していた家の花に囲まれた静かき、谷川の流れ、滞在先の主人の現地風の服装や佇まいなどを記す。一方、作品の末尾は次のように記述されている。

主人は横を振り向いて、ピトロクリの明るい谷を指さした。黒い河は依然として其の真中を流れてゐる。あの河を一里半北へ遡るとキリ克蘭キーの狭間があると云った。

高地人と低地人とキリ克蘭キーの狭間で戦った

時、屍が岩の間に挟まって、岩を打つ水を塞いだ。  
高地人と低地人の血を飲んだ河の流れは色を変へて三日の間ピトロクリの谷を通った。

自分は明日早朝キリクランキーの古戦場を訪はうと決心した。崖から出たら足の下に美しい薔薇の花弁が二三片散っていた。

美しい自然と、その背後にある歴史の重みを知った漱石は、深い印象をうけたと思われる。「英国嫌いに陥っていた漱石にとって、唯一の例外となったよき思い出の場所」とも評される<sup>5</sup>。

『永日小品』「昔」には、スコットランド（滞在地はピトロクリ Pitlochry<sup>6</sup>）への旅行が、何を契機ないし動機として行われたのか、また交通手段や滞在期間などについては明確な記述を欠いている。その謎に対し、まず角野喜六氏により、漱石を招いたのはジョン・ヘンリー・ディクソンという貿易商であり、漱石が滞在したのはディクソンの屋敷（ダンダーラック・ハウス<sup>7</sup>）であったこと等が確認された<sup>8</sup>。ついで平川祐弘氏により、ディクソンの人物像に関する手がかりとなる新聞記事が発見された<sup>9</sup>。それをもとに詳細な現地調査を実施した稲垣瑞穂氏により、いくつもの事実が解明されている。次にその中でも、本稿に関わる点を掲げる。

- ・イングランド・ヨークシャーの名門出身のディクソン（生没年は1838-1926）は、弁護士として活動する中でスコットランドに魅かれ、1902年にダンダーラック・ハウス（1882年建造）を購入しピトロクリに定住、地元の名士となった。
- ・一方で1894年以降たびたび海外を旅行し、日本にも

滞在し、日本の美術に興味を持った。日本の有名な美術家数人とも親交があり、英国の「日本協会」の会員でもあった。

- ・1892年にロンドンで発足した日本協会では、日英両国の研究者が中心となり、世界各国の文化人がロンドンの総会に集まり、日本文化の発展研究に取り組んだ。初代名誉会員12名の中には英国の外交官だったアーネスト・サトウ（Sir Ernest Mason Satow 1843-1929）や、高名な美術史家の岡倉天心（1863-1913）がおり、後にラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn 日本名：小泉八雲 1850-1904）も名を連ねた。
- ・漱石をスコットランドに導いた（ディクソンとの接点を作った）のは、留学生仲間の岡倉由三郎（天心の弟）と推定できる<sup>10</sup>。ディクソン家から出された漱石書簡は岡倉由三郎宛1通だけであり、天心を仲介してディクソンと知己であった可能性が高い。
- ・ダンダーラック・ハウスには、ディクソンによって日本庭園が造られた。1926年にディクソンが逝去（88歳）した後売却され、1935年にホテルになって現在に至っている。

以上のように、漱石のスコットランド旅行について判明してきたことは少なくない。しかし残された謎も多く、滞在期間については一週間程度から一ヶ月程度まで議論がある<sup>11</sup>。また、ロンドンからピトロクリまでの系路について、三つの鉄道路線のいずれを経由したかについて議論される中で、スコットランド訪問の動機に関して、英国文学に関わる沿線の名所を意識し、由緒の地を巡る意図があったとする説が提示されている<sup>12</sup>。



ダンダーラック・ハウス（2010年6月撮影）



ダンダーラック・ハウス周辺の景色（同）

## 2. 「自筆イギリス地図」の記載

以上を前提とし、実際に「自筆イギリス地図」を見てみよう。

まず「全体図」<sup>13</sup>は、最初に鉛筆書きされた図（および書き入れられた王国名等）があり、その上に地名がペン書きされている。整理すると次のようになる（おおむね北から南に記す、以下同じ）。



### ①鉛筆書き王国名等

Picts/Scots/Bernicia/Strathclyde/Deira/Middle Anglia/  
East Anglia/Saxons/Jute/N. Wales/W. Wales

### ②鉛筆書き地名等

Iona/Lorne/Cantyre<sup>14</sup>/Cunbrae/Ardrossan/Camnock/  
Glentuce/Canterbury/St. Augustine

### ③ペン書き地名

× Perth/Clyde/Forth

大ブリテン島は、イングランド・ウェールズ・スコットランドの3地域から構成される。①のうち Picts/Scots/N. Wales/W. Wales はスコットランドおよびウェールズの領域である。East Anglia は古代七王国の一つとして知られる。Middle Anglia はイングランド中央部を支配した Mercia の衛星国の一つである。Strathclyde はスコットランドとイングランドの境界地域にあった地方政権で、現在はスコットランドの一州となっている。Bernicia/Deira は古代の王国、Jute はジュート族（アングロ族、サクソン族とともにアングロサクソン族の

前身)の居住地域と考えられる。

②が記入された理由については特に思い当たらないが、おおむね北部（スコットランド）に集中しているといえる。③のうち、Clyde は The Firth of Clyde (ノース海峽へ流れるスコットランドの南西岸の入り江の名)、Forth は The Forth (スコットランド中南部の川の名)と考えられるが、何故この地名が注目されたかは不明である。

以上に対し、③の中の Perth は、多少の想像が可能である。13～15世紀にスコットランド王国の首都であったこの町は、ピトロクリ方面に行く際に通過する交通の要地であるが、同時にスコットの小説『パースの美女 The Fair Maid of Perth』(1828)の舞台でもあり、英文学者としての漱石の関心を引き付けるだけの由緒を持っていた<sup>15</sup>。全体図の中で Perth のみに×印が記されたこと背景として、ひとまず留意しておきたい。

次に地域図について考える<sup>16</sup>。こちらの図には、注目を示す×印が多く見つかる。



### ①鉛筆書き

Maormor = Thane or Baron or Lord/Cantyre

### ②朱ペン書き下線あり

Strathnaver/Caithness/Sutherland/Ross/Moray/Buchan  
/Mar/The Mearns/Badenoch/Lochaber/Angus/Athole

/Breadalbane/Stratharn/Menteith/Stirling/Lennox/  
The Lothians/The Merle/Tweeddale/Teviotdale/Carrick/  
Annandale/Galloway/Annandale

③朱ペン書き下線なし

Lorn/Caise of Gowrie<sup>17</sup>/Argyll/Bute/Arran/Cunningham  
/Clydesdale/Kyre<sup>18</sup>

④ペン書き

Inverness/×Elgin/Aberdeen/×Brechin/Arbroath/  
×Dunkeld/Perth/×St. Andrews/×Abernethy/×Dunblane/  
Stirling/×Glasgow/Dunfermline/Edinburgh/Berwick/×  
Whithorn

下線の有無に何らかの差異は認められないように思われる。一方、多くの地名が記される中に、×印が付けられた地名が見え、特に注目されていたように思われた。それを認めるなら、最初に鉛筆で書かれた輪郭に朱ペンで主要地名が入れられ、その後ペンで関心の地名が書き入れられた、と考えられる。では漱石が、×印の地名に注目した理由は何だったのだろうか。

実は×印を付された Elgin/Brechin/Dunkeld/St. Andrews/Abernethy/Dunblane /Glasgow/Whithorn は、大聖堂のある自治都市、司教座が置かれた都市、城郭が構えられるなど、王権から重視されたという共通点を持つ。このうち Glasgow は、漱石がグラスゴー大学の試験問題作成にあたった因縁が知られており、Dunkeld

は(×印の無い) Inverness や Caithness, Ross, Moray, Angus, Menteith, Lennox と共に、『マクベス』ゆかりの地でもある<sup>19</sup>。しかし、他の×印地名についてそうした点はあてはまらないと思われる以上は、地域図は文学方面の興味以前に、まずスコットランドの歴史に関わる一般的な関心によって記されていることが理解される。

漱石が本資料を作成した動機について、先行研究(特に塚本著作)によって、あるいはスコットランドの文学関係史蹟への関心に関わっているのではと予想した。しかし管見の限りでは、その証明はやや困難と思われる。少なくとも二枚の地図を作成した時点の漱石は、スコットランドの概括的な理解を志向していたようである。おそらくはスコットランドへの旅行が決まり、予備知識を得るためパブリック・スクールの教科書程度の地図を写し、地形や主要な地名を確認する際に作成されたというのが、本資料の成立に関する現時点での客観的な見方ではないだろうか。ただし肝心の目的地(Pitlochry)が登場しないことをどう考えるか、なお迷いも多い。

加えて、×印の都市の属性を踏まえている様子など、単なる独学や機械的な作業では理解できない側面もあり、その点も今後解明すべき課題として残されている。

## おわりに



筆者は2010年6月に、ピトクロリのダンダーラック・ハウスを訪問する機会を得た<sup>20</sup>。漱石の訪れた秋に対し、初夏の季節という違いはあったものの、風景の美しさは漱石の記述を裏切らなかった。

稲垣氏が現地調査した1984・1986年時点では、日本庭園の痕跡がわずかに残っていたようだ。しかし、2010年時点では確認は困難だった。ダンダーラック・ハウスに近接した十三段の階段(左)と、あるいは築山の跡かもしれない小さな盛土程度しか見つけられなかった<sup>21</sup>。せめてもの記念に、その際に撮影した写真を本稿の中に示し、今後新たな材料と出会えることを期したいと思う。

本稿の内容について、英国史や英国文学などの専門知識があれば、さらに進んだ、あるいは異なる見解が得られるかもしれない。大方のご教示をお願いする次第である。

- 1 磯部彰編集『国宝「史記」から漱石原稿まで—東北大学附属図書館の名品—』（第15回仙台国際シンポジウム実行委員会/文部科学省特定領域研究「東アジア出版文化の研究」総括班, 2003年）。本文中に記された企画展の図録でもある。
  - 2 東北大学附属図書館漱石文庫データベースのURLは次のとおり。  
http://dbr.library.tohoku.ac.jp/infolib/meta\_pub/G0000002soseki
  - 3 正確には、英国到着当初にケンブリッジに1泊2日の旅行をしているが、スコットランド行とは比較にならない短距離, 短期間といえる。稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』（清文堂, 2004年）pp.37-44など参照。なお同著作は、同じ著者による『漱石とイギリスの旅』（吾妻書房, 1987年）, 『夏目漱石と倫敦留学』（同, 1990年）の改訂新版である。
  - 4 以下の引用文は、『漱石全集』12（岩波書店, 1994年）pp.194-197。
  - 5 注3 稲垣 2004 著書 p.165。「よき思い出」の根拠として稲垣氏は、大正元年8月17日「塩原行」等の漱石自身の記述を挙げる。
  - 6 この地名の発音については、現地スコットランドでは「ピットロホリー」であり、漱石はロンドン風の発音を記しているという指摘がある。本稿では漱石の記述に従う。場所や村を意味する Pit と、石を意味する Chloich を語源とし、合わせて「石の多い場所」の意味（注3 稲垣 2004 著書 p.179）。
  - 7 Dundarach House。「樅の木要塞」の意味（注3 稲垣 2004 著書 p.179）。
  - 8 角野喜六「漱石とピトロクリーの宿所？」（『英語青年』1974年3月号）など。
  - 9 平川祐弘「漱石を招いてくれた英国人」（同編『夏目漱石』〈作家の世界〉番町書店, 1977年）において、ディクソン逝去を伝える新聞記事を提示している。
  - 10 岡倉由三郎以外にも、医師の知人渡辺和太郎、下宿の女主人リールを考える出口保夫説、クレイグ先生をあてる恒松郁生説、などが唱えられている。注3 稲垣 2004 著書 pp.197-198 参照。
  - 11 注3 稲垣 2004 著書 pp.194-196 参照。
  - 12 塚本利明『漱石と英国』（彩流社, 1987年）では漱石の中の、スコット（Sir Walter Scott 1771-1832）の小説『ウェイヴァリ Waverley』（1814）、バーズ（Robert Burns 1759-1796）の物語詩『シャンタのタム *Tam o'Shanter*』（1790）やシェイクスピア『マクベス *Macbeth*』（1606頃）ゆかりの地への関心が、経路選定に関わった論じている。なお、注3 稲垣 2004 著書 pp.199-200 も参照。
  - 13 無地・無罫の紙片使用、透かし無し。縦 21.1cm×横 13.4cm。管見の限り漱石文庫に該当する地図類は見当たらないが、たとえば「England After the Conquest 700」, “The Public Schools Historical Atlas” edited by C. Colbeck, M.A.; London; Longmans, Green, and CO.1885 (2<sup>ND</sup> Edition) が、近似した図として挙げられる。
  - 14 現在の Kintyre。
  - 15 注12 塚本著作 pp.233-234 参照。
  - 16 無地・無罫の紙片使用、透かし無し。縦 21.2cm×横 13.4cm。近似した地図としては、たとえば「Scotland in 1285」, “A School Atlas of English History” edited by Samuel Rawson Gardiner, London : Longmans, Green, 1892. が挙げられる。
  - 17 現在の Carse of Gowrie。
  - 18 不明。あるいは Ayr の写誤か。
  - 19 多胡吉郎『スコットランドの漱石』（中公新書, 2004年）p.114 以下など参照。
  - 20 同年8月末に開催された国際宗教学宗教学史会議（IAHR）第20回世界大会（カナダ・トロント）のパネル報告の準備（ロンドン大学に一年間の在外研修中だった三橋正氏との打ち合わせ）のため英国に赴き、立ち寄る機会を得た。その学会報告の内容については、科学研究費補助金報告書（挑戦的萌芽研究、課題番号 20652007）『日本における本覚思想の展開—中世後期の天台宗談義所寺院を中心に—』（2012年）参照。注3 稲垣 2004 年著書では経営者は J= アームストロング氏となっているが、1988年以降は Derek Smail 氏がオーナーとなり現在に至っている。
  - 21 注3 稲垣 2004 著作 p.189 に漱石当時の庭園の推定図を載せる。
- 【謝辞】
- 本稿の作成にあたっては、英国出身の Jon Morris 氏（東北大学大学院文学研究科博士後期課程在籍）に多大のご教示を賜った。記して感謝申し上げる。なお本稿は JSPS 科研費 23242040 の助成を受けた研究成果の一部である。
- （そねはら さとし、学術資源研究公開センター・史料館助教、附属図書館協力研究員）